

戦争を知らない  
世代へ③ 長崎編

ピース・フロム・ナガサキ

戦争を知らない世代へ③長崎編

# ピース・フロム ナガサキ

創価学会青年部反戦出版委員会

第三文明社

戦争を知らない世代へ③  
ピース・フロム・ナガサキ

---

昭和49年 8 月 9 日      初版第 1 刷発行

編 者    創価学会青年部反戦出版委員会

発行者    山崎善智

発行所    株式会社    第三文明社

郵便番号    101    東京都千代田区猿樂町 2-5-4

印刷所    凸版印刷株式会社

---

## はじめに

一瞬にして緑の大地を焦土と化し、約十五万人もの犠牲者を出した原子爆弾が長崎に投下されて、はや二十九年が経過した。だが、今も「原爆」は生きている。

平和を求め、願う人びとの叫びを嘲笑するかのように、人類のみならず地球をも破壊するほどの核兵器が蓄積されるにいたっている。核兵器の開発、巨大化に伴っての実験は、広島や長崎と同じ犠牲者を出したビキニを含めて千回にも及び、生あるもの全てを死滅させる方向に向かっていく。

また、高齢化する被爆体験者と戦争を知らない世代との意識の隔絶は、被爆体験の風化を加速度的に進め、人類の悲願たるべき「二度と核兵器の使用を許すな！」との叫びさえも空虚な響きになろうとしている。

長崎に住むわれわれは、この厳しい現実を直視しつつ被爆体験の伝承および原水禁運動の継承の責任と使命を遂行せんとして、昨年八月に「原水爆禁止長崎平和集会」を開催するに至った。席上、大会宣言の一項で「被爆体験集」を被爆三十周年（注・昭和五十年）までに出版することを謳い、地道ではあるが着実に準備を進めてきたのである。その機運の高まりが今回ここに第一巻

発刊の運びとなったことを何よりも嬉しく思う。

ほとんどの人が初めての証言であり、一字一句に貴重な平和への叫びを感じとる思いであるが、ある人は目に涙を浮かべ、握る拳をワナワナとふるわせて訴えかける姿に接するにつけ、困難ではあったが発刊事業を決意し、取り組んでよかったと痛感している。願わくば、ピース・フロム・ナガサキ（平和は長崎から）と標榜する多くの人たちの発露から、世に出る機会に恵まれた本書を、一人でも多くの人が一読され、核戦争の抑止力ともなるべき被爆体験を肉化して、一人一人の生命の中に強固な「平和の砦」を築きつつ、反戦・平和の意識啓蒙運動推進への連帯を深めていきたいと念じてやまないものである。

昭和四十九年八月九日

創価学会青年部

長崎県反戦平和委員会委員長

小森一興

# 目次

はじめに 1

## ●第1章

|                         |       |    |
|-------------------------|-------|----|
| 左腕には今もガラスのかけらが……………     | 大川政子  | 10 |
| 親兄弟、最愛の一人息子までも皆殺しに…………… | 田中キミ子 | 16 |
| この傷は平和遺産……………           | 深堀 勇  | 22 |
| 医薬もなく木綿針で傷口を縫う……………     | 森山イツ子 | 26 |
| 残酷に引き裂かれた平和な家庭……………     | 橋本トヨミ | 30 |
| 鑄型に押し込められた身体……………       | 中野圭子  | 42 |
| 忘れることのできない日……………        | 峰 阿沙子 | 48 |
| 戦争で苦しむのは国民……………         | 釜崎 一  | 53 |
| 再軍備主張者に見せたかった惨状……………    | 福谷照代  | 58 |
| 寂しい同窓会……………             | 森本正記  | 63 |
| 一人、二人と逝く同級生……………        | 寺里愛子  | 67 |

防空壕を埋める惨死体……………岩永繁隆

人間らしさを捨てさせる戦争……………吉岡澄子

級友が目の前で炎の中に……………宮崎角治

被爆後二十年目に原爆症の宣言……………平野ハツエ

遺骨箱には自分の名が……………谷山駒一

オレンジ色の光ですべてが狂った……………久谷ヒサミ

死の淵を二度までさまよって……………藤村悦子

## ●第2章

「お母ちゃん熱いよ」と死んでいった長男……………松尾シズ子

亡き人に代わり平和への努力を……………島田春己

脳裏から離れない犠牲者の顔……………岡 信子

まさか落下傘が爆発するとは……………渡辺勝之

火がついたような背中の痛み……………平野ハル子

忘れないこと、それが歯止めに……………山崎 馨

広島の原爆記事を読む最中に……………尾崎庄松

我が家の焼跡には白骨三体……………渡辺源吾

泣き叫ぶ朝鮮人の声と姿……………藤田政子

152 145 142 138 133 128 123 118 114 106 100 92 87 81 76 71

太陽の光が消え地球の最後かと……………田中昭代

父は写真で埋葬、やがて母も……………若浦ヨシ

光に襲われ焦げた腕……………白山カツエ

### ●第3章

容易に離れない原爆病の宿命……………本城好子

喘ぎながら生きつないだ二十九年間……………原田寒子

被爆者の心の中の爪跡は消えない……………田口藤太郎

被爆体験の語部として生きねば……………東ツネ子

救援活動で駆け回った現場……………松山万吉

背中から息がもれる……………島田テル子

一瞬にして六人の家族全員を失う……………坂本喜代治

「父さんの顔は黒くなってこわい」……………西本好春

人間連帯のスクラムをめざして……………梅林二也

原水爆ある限り安心できない……………浦川与吉

二十数年後に父母は原爆病死……………浜口ヨシエ

随所に転がる黒焦げの遺体……………浜口巍

地獄の叫び渦巻く海軍病院……………林田ユキヨ

236 228 224 219 213 208 202 198 191 186 181 176 172 167 161 157

「かんにんして、私は恐ろしいのです」……………永江シヅ子

#### ●第4章

復活する戦争体験への追慕……………大森 実

まだ何も解決されていない……………秋月辰一郎

原水禁運動を市民の手に……………尾賀 始

原爆による障害……………岡島俊三

反核証言の炬火よ燃えろ……………鎌田定夫

平和の本質は「たたかい」……………近藤嘉昭

原爆被災資料の推進を……………角本満雄

「援護法」「非核三原則」立法化実現のために……………葉山利行

被爆伝承の意義……………船山忠弘

平和時の平和運動こそ大事……………松尾哲男

世界恒久平和の理想達成をめざして……………諸谷義武

編集後記

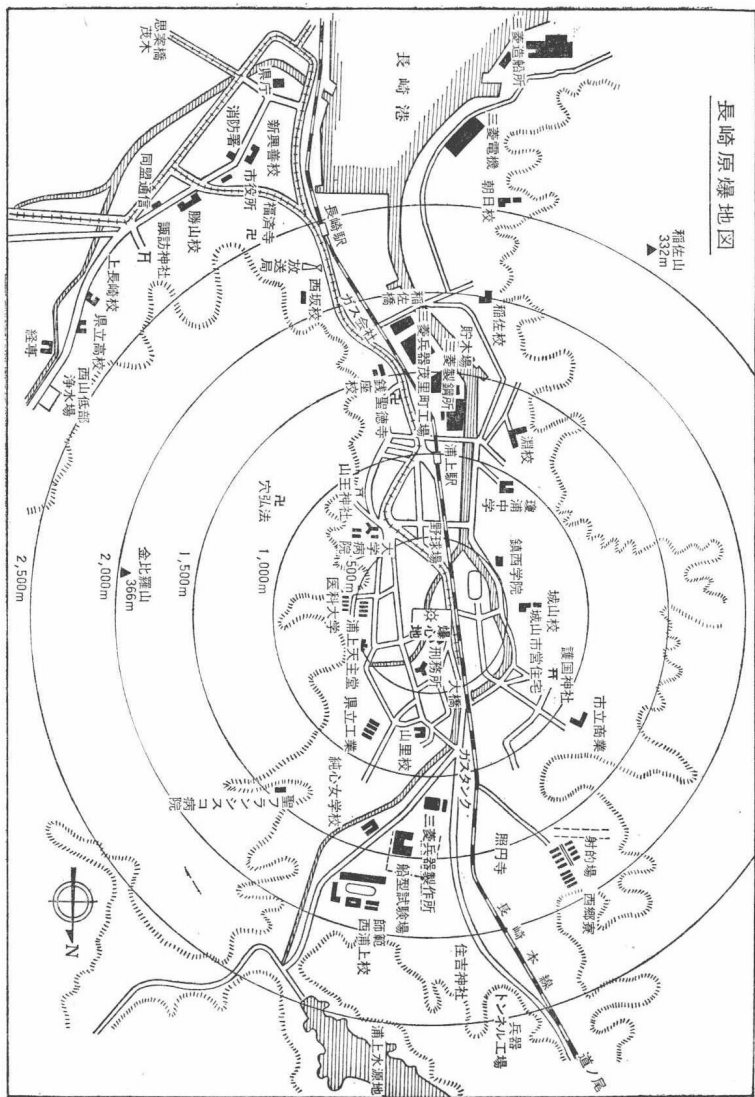
292

★写真提供 長崎市

288 284 280 277 274 271 267 263 259 256 252 243

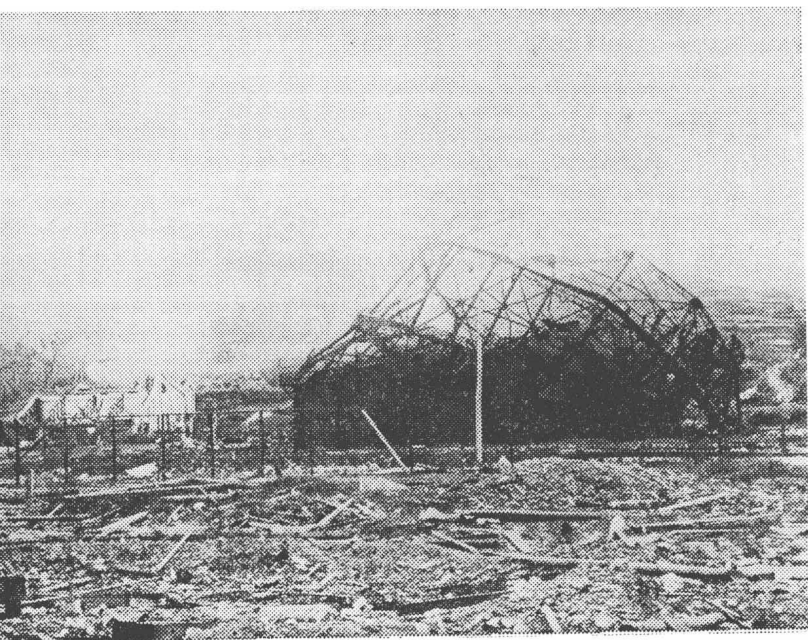


# 長崎原爆地図



# 第1章

——爆心地から1.5キロ以内で被爆



爆心地から約950メートルにあったガスタンク

左腕には今もガラスのかけらが

——岩川町の自宅で被爆、0.8キロ

醜い跡

「政子、政子」と呼ぶ母の声が遠くで聞こえる。私は今どうなっているのだろう。頭が重い、いや軽いのかな。自分の頭か、人の頭かよくわからない。まっくらな狭いところに、頭から水をかぶり、ずぶぬれになって一人いる。

また「政子、政子」と母の声。「ここにいろよ、かあちゃんはどこにいろとね」「おお、生きていたね、怪我はしとらんね」「まっくらで、なんもわからん」。からだを動かそうと思っても、全身しびれて思うように動かない。やっと手をあげて頭を二、三回押してみた。光がさしこんできたので夢中で板やドロ、瓦をのけて、やっと外へ出た。なんと天井や屋根の下敷きになっていたのだ。

見渡すかぎり家は倒れて、あちこちで火の手が上がっている。立っているのは、鉄筋コンクリ



大川 政子

当時 8 歳

ートの長崎医大だけ。そこも窓から火をふいている。

昭和二十年八月九日。長崎に原爆が投下されて、初めて私が見た光景だった。

まだ母と二人の妹が足の下にいる。「かあちゃん、外に出られたよ」「そうか、よかったね、怪我はしとらんね」といわれ、初めて自分の姿にびっくりした。腕の肉が飛び出している。耳に何かがかぶさっているのです、のけようとしたら、頭が割れて、たれさがっている。左の目の上から頭のほうに割れているのだ。水と違っていたのは血だった。顔も、両腕にも、腹にも、足にも、怪我をしている。全身しびれて思うように動けない。

「誰か、かあちゃんたちを助けて！」小学二年の私には、なにもできず、おろおろするばかり。やっと母たちも助け出され、異人墓地へ逃げる途中、火の中から「助けて、あつい、助けて」と呼ぶ声。誰も自分が逃げるのに必死だ。墓地は、怪我人と死人の山だった。水、水が飲みたい。少しの水たまりがあると皆むらがつて、血の浮いた、ドロツとした水に、それでも、アリが砂糖にたかるように飲んだ。

祖母から、悪いことをすると死んでから地獄に落ち、火に焼かれ、針の山に入れられ、血の海に落とされると聞いていたが、今が地獄だと思った。でも、火の中で叫んでいた知り合いのおばさんは、やさしい人だった。私だって、頭から血をかぶり、全身切り裂かれているけれど、悪いことはしていない。なぜ、こんな目にあわなければいけないの？

その夜は墓地に野宿して、翌日、母の里（京泊）から捜しにきてくれた人と三重村に帰った。私を見た人は一日生きていればよいほうだろうと、みんな思ったそうだ。

しかし、一か月後、足だけ怪我していた母が、気が変になって死んだ。続いて、怪我一つしていなかった二人の妹も口がきけなくなつて次々に死んでいった。六歳の妹は母が死んで数日後、それから一か月もたたないで二歳の妹が……。私は不思議と元氣になったが、頭髮が全部抜け、村の子供達から「はげ、はげ」といわれ、悲しい思いをした。

翌年三月、父が台湾から復員。また長崎に帰ってきた。新しい母を迎え、新しい生活が始まり、やっと平和がきたように思えた。しかし被爆者には、それからが生と死との闘いの始まりだった。毎年毎年、原爆病で死んでいく人が後を絶たない。また、治る見込みもなく病床にいる人、私だって今はなんともないけど、いつ発病するかわからない。原爆でうけた傷跡はみんなイレズミのように青黒くなった。顔から小さなガラスのかけらが十数個出てきた。その跡が、墨すゐをつけたように見える。左目の上の傷跡も肉が盛り上がり、醜い跡がある。

学校では、顔の傷跡を見て「まるで、お岩さんみたいね」といわれ、道では私の顔を見て笑つて通りすぎて行く人、たまに親切な人がいても「顔に墨がついていますよ」と教えてくれる。ああ、いやだ、いやだ！ 私はなんで、こんな恥ずかしい目にあわなければいけないの！ なぜなの！

戦争を憎む

少しでも、きれいになりたいのは女の願い。鏡を見るたびに悲しみ、誰にもぶつけられない怒りでいっぱいである。しかし磨屋小学校時代は、まだ健康でよかったのだが、桜馬場中学校を卒業すると、恐れていた原爆病の症状が出始めた。貧血、冷え症、内出血して手足に紫のアザができては消え、消えては出る。私も全身血のアザができて死ぬのかと思うと、いても立ってもいられない。

人類発展のためにあるべき科学技術が、誤れる指導者によって作り出した原爆病。その科学技術では、どうしても治すことのできない矛盾。今でも私の左腕には、その時のガラスのかけらが入っている。なんの希望もない灰色の青春。なぜ私だけが……。

しかし、私にも明るい春がきた。

昭和三十三年二月二十二日、母や創価学会の女子部の方に勧められ日蓮正宗に入信した。貧血、冷え症もいつの間にか治り、昭和三十六年四月、あきらめて夢にも見なかった鏡の中の自分の花嫁姿を見ることができた。二人の男の子にも恵まれた。

しかし、子供の両足に内出血のアザを見た時は、今さらながら原爆病の恐ろしさを知った。このような悲しい体験は私だけでたくさんである。子供たちにも、全世界の人びとにも、絶対に体

驗させてはいけない。戦争の悲惨なことは誰もが知っているはずなのに、なぜ、戦争は途絶えないのだろうか。私は本当に原爆を、いや、戦争を憎む。

創価学会の第二代戸田会長は「たとえある国が原子爆弾を用いて、世界を征服しようとも、その民族、それを使用したものは悪魔であり、魔ものであるという思想を、全世界に弘めること」を昭和三十二年九月に絶叫した。私も同じ気持ちになって絶叫したい。

また、第三代池田会長は昭和四十七年十一月に「生命の尊厳」は「国家の尊厳」よりも優先すると述べ「国家は一切の軍備を解き、徴兵権を放棄し、戦争を行なうことを絶対にやめるべきである、といたい。これをまず、具体的な目標として、恒久平和実現を目指していくことが、私は宗教者としての使命であり、人間の責任である」とも強調した。さらに「絶望的ともいえる恐るべき世界をつくったのは、もちろん過去からの累積るいせきがあるとはいえ、現在この地上に生きている世代であります。これをこのままにして、次の世代に引き渡すというのでは、あまりにも私達は無責任である。あらゆる指導者達も無責任である。まして、われわれの時代で人類の歴史を終わらせるようなことがあっては断じてならない。われわれの手によって、本当に解決していくのが、私どもの子供の世代、そして、さらにその子の世代に対する人間としての責任である、と訴えておきたい」と。

死んで当然ほどの傷を受け、狂って当然ほどの悲惨な目にあいながら、現在健康に生きている